

命ある限り学び続けるということ

安村典子

岡先生との出会いは私にとって衝撃的でした。私が京都大学の大学院（修士過程）に入学した1968年に、岡先生は「ホメロス研究」と題する講義を京大で開講されました。その時先生はまだ同志社大学の助教授で、翌年京大に移ってこられたのでした。そのホメロスの講義は先生が当時研究しておられた、モチーフの分析を手がかりとしたホメロス解釈でしたが、それは私にとってそれまでに聞いたことのない新しい研究でした。先生の語り口は実にシャープで論理の展開は小気味良く、胸がすくような分析で、大変説得力がありました。ホメロス理解の新しい世界を眼前に繰り広げて下さったような気がします。新進気鋭の研究者がそのとき情熱をかたむけて研究している問題を語りかけるということは、これほどにも迫力があり、学生の心を躍らせるものなのだということを知りました。

その後先生には幾多のお世話にもなり、また御迷惑もおかけしてしまいましたが、その中で忘れられない思い出を一つだけ選びだすとすれば、それは1994年7月のことになります。その夏私はイギリスに留学し、当地の大学院に入りたいと考えておりましたので、渡英直前に御挨拶に伺ったのでした。先生はお忙しい中でお時間をさいて下さり、立派なレストランでフランス料理を御馳走して下さいました。すでにお病氣と闘っておられる頃でしたのでフランス料理はお身体にさわるのではないかと思い、その旨申し上げると、たまにはこのような料理も食べますとおっしゃって下さいました。しかしおそらく私のためにそう言って下さったに違いなく、有り難いと同時に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そのとき先生は御自身の留学の際のご経験を語って下さいましたが、そのお言葉にその後どれほど力づけられたか知れません。私が2度目の渡英であるとお話すると、先生はご自身も2度ドイツに留学され、2度目の留学で本当に勉強の成果をあげることができたとお話し下さいました。1度目のドイツ留学のことを先生は「そこに宝の山があるのに何も取ることはできなかった」と表現されました。私がびっくりして、岡先生にもそのようなことがあり得るのですかと問い直しますと、重ねて同じ言葉を静かに繰り返されまし

た。私はそこに込められた先生の、様々な深い思いを考えるとしばらくの間何も言うことができませんでした。先生の若き日への思い、そしてお若い頃から変わることなく続けられた学問に対する真摯な姿勢、冷静で論理的な思考と同時に「宝」を追求せずにはおかない情熱の人でもあること、それらすべてがそのお言葉に込められているように思いました。そしてまた同時に、自分としては大きな決意をして2度目の留学をしようとしていた私に、「2度目はきっと宝の山から何かを取り出すことができるはずだと」と励まして下さったのでした。その後ケンブリッジの講義室や図書館で学んでいた時、これは本当に宝の山だと、先生のお言葉を何度思い出し、先生のお顔を何度思い浮かべたか知れません。その時にはいつも、宝の山からなにかひとつでも得たい、先生が励まして下さったように、とっていました。

岡先生ほど冷厳さと情熱が高度に絡み合っておられた方を他に知りません。私にとって岡先生もまた「宝の山」で、その高さの前に立ちすくんだまま、ほとんど手もつけられないうちに逝ってしまわれたように思います。私がおっと勉強していれば、もっと多くを先生から頂くことができたに違いないのに。あの学問の高さ、あの静かであつ激しい学問への情熱には到底及びもつきませんが、しかし学問に対する姿勢は岡先生に教えて頂いたと思っています。一生学び続ける人間でありたい、とお姿を思い浮かべながら今また強く心に刻んでいます。